

参考資料

ヒアリング調査

(1) 施設利用者

ア 実施概要

本施設には様々な人が訪れることが予想されます。子どもだけでなく、中学生、高校生、大人も含めて、利用すると想定される人々に直接ヒアリングを行いました。このヒアリングでは、利用者の関心や、求める書籍／資料についての洞察を得て、今後の選書に活かせるよう、利用者の使い勝手や使い心地なども探求しました。

ヒアリング方法は、人と本（読者と著者）が1対1で向きあうという読書の特性から、参加者一人ひとりとの対話により、深い理解を得ることができる少人数のグループインタビュー形式としました。その場での追加質問やフォローアップを行うなど、柔軟な対応を行うことで、回答をより詳細に探究しました。

対象者	小学生4名、中学生4名、高校生5名 一般6名 計19名
日時	令和6年2月18日（日） ①13：00～13：45／②14：00～14：45／③17：00～18：00
場所	①・②STV北2条ビル教育委員会会議室／③札幌市図書・情報館
方法	グループインタビュー インタビュアー 幅允孝氏（有限会社BACH代表）
質問内容	・ 普段の読書傾向、読む本の種類、ジャンル、本との接し方 ・ 「（仮称）こども本の森」に期待すること ・ 自分が選書する立場だとしたら、どのような本を選ぶか など

イ 実施結果

	主な意見
普段の読書傾向	➤ 幼少期から絵本に親しみ、現在も引き続き本を読んでいる方、本が好きな方が多く参加。 ➤ 高校 3 年生は課題、進路や受験勉強など、学業との兼ねあいで読む時間が持てない様子。 ・ 読まないといけないと思いつつ、『エミール』やドストエフスキー作品などを少し読んではやめてしまう。(高校 2 年生) ・ メディアミックスされている作品は手をのばしやすい。(高校 2 年生) ・ 書店で買うより学校の図書室で借りて読む。目が悪くなりそうなためデジタルでは読まない。(中学 1 年生) ・ ソファで寝転がりながら読むのが好き。(小学 3 年生) ・ ネットで本を調べることもあるが、同じくらい書店のおすすめコーナーや店員のポップなどを見て買うこともある。(高校 2 年生) ・ 好きな著者やシリーズの本を読んで制覇している。(小学 5 年生) ・ 知らないことを知れる。絶対体験できないことをできるのが本の好きなこと。(一般) ・ 絵本の読み聞かせの活動をしているため絵本を読む機会が多い。(一般) ・ 子どもの時の方が読んでいた。何度も親が読み聞かせてくれた絵本は思い入れが強い。(一般) ・ 本が手元にないのは困る。常に何冊か併読し、読み進まないものは一度本棚に戻す。(一般) ・ 貸出上限を毎回持ち帰って読んで返してを繰り返している。(一般)

	主な意見
気になる本について、その理由	➤ 手にとりたくなるきっかけとして、タイトルの面白さ、表紙のビジュアルの良さが誘発点となる様子が顕著に見られた。 ・ 自然について視覚的に学べる本。(高校3年生) ・ 最近、映画を見て「なぜ人は戦争をするのか」と考え手に取った。(中学1年生) ・ 哲学を最近考えるようになり「死んだらどこへ行くのか、本当に自分がここにいるのか」と気になりタイトルから手に取った。(中学1年生) ・ 例えば恋愛小説などによく出るワード「好き」。当たり前を受け止めていたが、その1つ1つの言葉に不思議さを感じたため。(中学2年生) ・ サブタイトルが気になり、中身をパラパラめくると面白そうだった。(小学1年生) ・ 歴史が好き。他の人や知らない人を知ることができて面白い。(小学6年生) ・ 装丁に惹かれた。中身もすごそうだと思った。(高校2年生) ・ どんなところからでも読み進められる絵本は良い。(一般) ・ 写真集などビジュアルに優れた本が図書館にあればずっと図書館でいたいと思う。(一般)

	主な意見
こんな図書館になってほしい	・ 世界を旅するようにいろんな時代や世界感にぐっと入り込める図書館に。(高校3年生) ・ 歴史に学べる図書館。(小学6年生) ・ 手に入りにくい、金額の高い本も気軽に読めて興味が広がる図書館に。(高校3年生) ・ 個人で静かに読める場と、複数人で来て楽しく読む場があると良い。(中学2年生) ・ 自分が知らない世界、新しい視点を得られるようになると良い。(高校2年生) ・ ジャンルを横断的にすることで今まで興味を持ってなかったところを知れるように。(中学2年生) ・ 本棚に椅子がついている、小さい椅子が点在しているなど、気になる本を見つけたときにすぐ読めるように。(中学1年生) ・ 本のあるスペースと読むスペースが分かれているのではなく、境界を曖昧にしてほしい。次から次に色々な本を読むために。(高校2年生) ・ 中央図書館の Instagram のように SNS を通じて、コーナーのお知らせや本の紹介をしていくのもとても良い。(高校2年生) ・ 2、3歳くらいの子も楽しめるようにしてほしい。(小学2年生) ・ 寝っ転がってくつろげる、リラックスできるスペースがあると良い。(小学3年生) ・ 本が年齢で区切られていない図書館。(一般) ・ 靴が脱げる図書館。(一般) ・ 親も子どももそれぞれが集中して読めるような空間。(一般) ・ 広いところと自分の世界に没入できるスペースがあると良い。(一般) ・ 子どもがこっそり本を選んで読めるような図書館。(一般) ・ 北大は自然が多いので明るく自然光の入る場所。(一般)

(2) 施設関係者

ア 実施概要

本施設は寄附者、北海道大学、札幌市が同じ方向を目指して施設をつくりあげていくことが望めます。関係者となる北海道大学に施設への考え方などをヒアリングし、コンセプト検討や運営方針の検討に活かします。

さらに、準備段階や開館後は、様々な人に施設に関わっていただくことで、学びや活動が活性化していくことが期待されます。そのため、北海道大学の学生を対象にヒアリングを行い、利用者としての視点や施設への関わり方の可能性を探りました。

【大学関係者】

対象	行松泰弘理事、山本文彦理事、長谷川康弘副理事、 社会共創部社会連携課、附属図書館、学務課等 計 12 名
日時	令和6年2月19日(月) 8:45~10:00
方法	対面によるヒアリング
質問内容	・「(仮称) こども本の森」に対する考え、期待すること ・「(仮称) こども本の森」との連携について ・学生と「(仮称) こども本の森」の関わり方について ・産学官連携についての取組 など

【学生】

対象	北海道大学の学生 計 21 名 (3 グループ)
日時	令和6年2月19日(月) ①13:00~13:45/②14:00~14:45/③15:00~15:45
方法	グループインタビュー インタビュアー 幅允孝氏(有限会社 BACH 代表)
質問内容	・普段の読書傾向、読む本の種類、ジャンル、本との接し方 ・「(仮称) こども本の森」に期待すること ・準備や運営に携わっても良いと思う条件 ・自身の研究を子どもに伝えるとしたら、やってみたいか ・自分が選書する立場だとしたら、どのような本を選ぶか など

イ 実施結果（大学関係者）

主な意見

- ・ もしかすると唯一の大学の中の「こども本の森」になる。研究とともにグローバルな言語が飛び交うような雰囲気を味わえる場所になると良い。
- ・ キャンパスにはアイヌのコタンの古い遺跡が残っている。アイヌ文化や、北大の歴史的経緯を感じられるものを取り入れてほしい。
- ・ キャンパス内で施設がぽつんとあるのではなく、学内と色々な関係を持つ場所になってほしい。
- ・ 本の分類等も含め、大学のいろいろな学部と呼応していくと面白い。また学問は一つ一つの科目ごとに深く学べるので、特徴づけられる。
- ・ 入るのに敷居が高いイメージを持たれている。子どもが気軽に訪れることで「大学ってこういうところなんだ」と感じてもらえる機会にしたい。
- ・ 常時ではないが大学生も活用できる、職員も寄りたくなる、子どもを連れてきたくなるような、子どもと大学生が交流できるような仕掛けがほしい。
- ・ 自然があるので、屋外でのイベントや読み聞かせ、中と外との連動性があると良い。動物や昆虫の本を持って、学生や職員が分かりやすく教えるなど。
- ・ 学内の施設を活用すれば、色々なイベント等ができそうである。
- ・ 修学旅行生を受け入れる等があると良い。北海道は自治体数が非常に多いため、他自治体との連携という意味で利用者の広がりを期待している。
- ・ 小学生と博士課程は交流が生まれやすい。また、必ずしも大学院生から小学生に教えるというだけでなく、学びあいというコンセプトをもってほしい。逆に子どもたちが大学院生や大人に教えるという場で合っても良い。そのような場であると、社会価値としても高い場になる。
- ・ 学生の関わり方は有償、無償もあるが、やり方次第。大学生自身も学びになるため、主体的に学ぶ仕組みが重要になる。

ウ 実施結果（学生）

	主な意見
普段の読書傾向	➤ 子どもの頃から本に触れていた方、本や図書館に関わる仕事をしたことがあるという方も参加。研究関連本を読むことが多く、息抜きとして他のジャンルの本を読む傾向がある。 ➤ 子どもを持つ社会人の大学院生は、絵本に触れる機会も多い。 ・ デザイン系の研究室で、素材に関する本をよく読む。 ・ 同人誌や書籍を作っているので、今回のインタビューも興味があり参加した。 ・ 研究で人工知能系の専門書を読むことが多い。個人的には哲学の本も読む。 ・ 子どもの頃からずっと本を読んでおり、最近はある方の推薦図書を読む。大学図書館を使う。 ・ 子どもが2歳なので、絵本に触れることが多くなった。 ・ 研究に関する本を読むが、難しくて嫌になることが多いので、小説なども読む。 ・ 本というか文字が好き。田舎に住んでおり、中学生時代に図書館で勉強していたことが影響。

	主な意見
選書したい本について、その理由	➤ 子どもの年齢を気にせず、大人でも読める本を選ぶ傾向が見られた。また、大人が読んでも刺さるような絵本や児童書も選ばれた。 ・ THE 子ども向けの本というより、キャッチーで少し大人向けの本が入っていると良い。 ・ 写真が綺麗な本。自然なら帰り道に北大の中で見つけられる。 ・ 思いやりにあふれた、心がやさしくなる本。読み聞かせていて、自分が読んでいてもほっこりするもの。 ・ 自分が子どもの頃に読んだもの。大人になった今でも読みたいと感じる。 ・ 本は偶発と背伸びが大事だと思う。子どもも少し背伸びをすれば分かるものがある。 ・ 子どもがわくわく感を持てる本があると良い。大人向けや洋書でも、少し難しかったという印象を残し、大人になったときにまたその本に出会うことができる。 ・ 一般的な本屋さんに置いていない本があると良い。 ・ 偶然出会ったときに深く刺さる本。こういう生き方もあると気づくと、自分が自分ではめている枷に気付ける。

	主な意見
子ども本の森に期待すること	・ 大学生が普段使いできるようになっていると良い。 ・ 靴を脱げる、子どもとごろごろできるスペースが欲しい。 ・ 話を思い切りして良い図書館、おしゃべりできる図書館。 ・ 子どもがやってきて、自分一人ですぐに探しにいい、お母さんたちの目を気にせずに読めるなどが良い。 ・ 小さな頃から知識に触れ、成長して行き詰った時にも助けてくれることを知ってほしい。 ・ 受験で視野が狭まる前に、哲学など、教養について学べる、そういう教育が図書館にあると良い。 ・ 先端の技術を図書館で使うのも面白い。オフィスやヘルシンキなど図書館の中にマシン、3Dプリンターがあり、自由に使えるのは面白い環境。 ・ 発表できる場所。子どもたちが自分で絵本をつくる、それを飾ることができてフィードバックが来る。自分でものをつくる経験があり、誰かの手に取ってもらえる経験ができると良い。 ・ 本当に一人で読みたい本、読む行為そのものを楽しめる空間、落ち着いて一人でいられる場所があると良い。 ・ 自然豊かな場所で、セミやリスなどの生き物もいるので、活かせると良い。 ・ 中高生など、読みたい本が分からなくなる時期があると思う。自分もそういう経験があるので、そういう人に向けて好きな本が選べる場所になると良い。 ・ おとなしくできない子もいる。そういう子も過ごせる、音楽や映像をきっかけとして本の世界に入り集中する等の工夫があると良い。 ・ 外国にルーツを持つ子どもも多い。洋書をまとめて一箇所に置かずバラバラに置けば、子ども同士が触れあい、ことばの壁を超えられる。 ・ 自分の研究を伝えられる場になると良い。自身はハイブリットロケットの研究をしている、子どもたちにワクワクしてもらえるはず。 ・ 本を通して知ったことが、大学であればこの学部、学問になるんだと伝えられる、その入口として図書館があると良い。 ・ 自然豊かな場所なので、活かせると良い。自然光が入ると良い。

	主な意見
学生の関わり方	・ 気軽にふらっと参加できると良い。参加のハードルが低い方が良い。 ・ ボランティアの方が良い。講師料が目的になると長くは続かないため、自発的にやってみたいとなるのが良い。 ・ 学内の実績としてオフィシャルに出せるメリットがあればやる。就職などにもアピールできる。 ・ 完成してからではなく、早い段階から接点がある方が関わりやすい。つくっている最中に関われると愛着も湧く。 ・ 公開授業を図書館でやる。その帰りがけに大学生に声をかければ、自然と交流できる。子どもにとって何を話しているか分からなくても、面白そうな大人がいる、と感じてもらえる。 ・ 図書館を研究のフィールドとして使えるとすれば、使いたい人はいるのではないか。実際的な研究の場にもなると思う。

(3) 先行施設

ア 実施概要

これまでの「こども本の森」に携わった方または現在携わっている方に、こども本の森としての機能や公共図書館との違い、立ち上げや運営に関すること、課題や教訓などをうかがいました。

対象	こども本の森（中之島、神戸）館長2名 こども本の森立ち上げ経験者2名
期間	令和6年1月24日（水）～1月25日（木）各1時間
方法	オンラインによるヒアリング
質問内容	・施設のアイデンティティや、通常の公共図書館との違い ・運営方針や、注力していること、気を付けていること ・運営において工夫していること、また課題など ・本の森の運営に必要な人材、スキル等 ・市立図書館や学校との連携について考えられる方法 ・これからできる本の森へのアドバイス など

イ 実施結果（先行施設）

主な意見

◆ 公共図書館との違い

- ・ 「こども本の森」としてのブランド力があること。90 分の予約制による特別感もその一つ。
- ・ 様々なジャンル（本）をテーマとした、自由なイベントが開催できること。

◆ 注力していること・課題

- ・ 平日の入館者数を上げること。子どもしか来てはダメだというイメージをどう払拭するか。平日にインバウンドも積極的に受け入れる、平日は学校の遠足をできるだけ受け入れることも行っている。

◆ 運営に求められるスキル

- ・ 本のことを知っているだけでなく子どもの相手ができ、総合的に面倒見が良い人。広報的な意味でデザインスキルがある人。サービス業に向けた人柄、ホスピタリティのある人。他大学、企業との連携を考えると、交渉能力もあると良い。グッズ等 VI をまとめるコーディネーターも必要。

◆ 学校連携

- ・ 団体貸出等は人員的に難しい。図書館法上の図書館ではなく、そうしたサービスを実施していないからこそ少数精鋭で運営できている。
- ・ 職業体験、遠足などは継続的に実施していく。障害をもったお子さんたちの学校の受け入れを強化していくべく、アプローチをしているところ。

◆ アドバイス

- ・ 「こども本の森」のブランド力を維持しながらの運営をしていけると良い。
- ・ 札幌市内の面白い会社や個人の方とコラボすると面白い施設になる。

◆ その他

- ・ インバウンド対応として接遇等の研修をしているが、特別に多言語に秀でたスタッフを雇用するということはない（ただし、英語が話せるスタッフは多い）。

ウ 実施結果（立ち上げ経験者）

主な意見

◆ 札幌市における特色

- ・ 気候や、自然に囲まれていること。大学という学び舎に、さらに小さな子どもの図書館があることは世界を見渡しても、施設構成的にもユニーク。
- ・ これまでの「こども本の森」は、子どもたちはインプット、受け入れることが中心。提供してもらったものを享受する。創造の循環ができれば、特色になる。

◆ これまでの課題・工夫

- ・ サインや什器など必要なことを抽出、予算配分も含めて明確にしておく。

◆ 準備・体制

- ・ 寄贈本（中にはモノも混じっている）の仕分け等でも人員・場所が必要。
- ・ 洋書はなかなか届かないので、早めに発注しておいた方がよい。

◆ スキル・採用

- ・ デザインに関連した視覚伝達におけるソフトが使える人がインハウスでいるのが大事。
- ・ 図書館経験が長い方だけでなく、別業界にいたが本は好きで詳しいという人も混ざっていると、健やかで風通しが良い。
- ・ ブランドの安定と向上のため、ブランド力を下げない人、ホスピタリティを理解している人。感動体験のある人。
- ・ 採用の時点でパブリシティを意識も重要。話題性が高まっている際に募集を行い、その際にロゴがきれいに見えると期待感も高まる。

◆ 市立図書館、学校図書館との連携

- ・ 本棚が変容していくので、本の森企画を他の図書館に提案するなど。
- ・ 興味がある人（意識の高い人）だけでなく、全ての子どもたちに届けるためには学校とつながることは重要。
- ・ 市立図書館がフォローすることで、来て楽しかった、で終わることなく、次は図書館に行ってみようとなる連携ができると本来の目的に近づく。市立図書館の利用者登録ができると、本を読むことの習慣化の創出になる。
- ・ 収容冊数が少ないため、本の森で除籍したものを使ってもらえると良い。
- ・ メディアの使い分けが難しくなっている時代、本の読み方は学校の教育現場では教えない。読むという行為の深度と道具が多様化する中で、紙のある本をわざわざある場所に行って読むとはどういうことかを伝えられる場所になると良い。そういう映像を撮影し、学校で流すなども良い。

◆ アドバイス

- ・ 来館者の方を向いて中身をつくっていくこと。
- ・ 他の本の森と競いあうのではなく、ファミリーとして見つち、ならではのサイトスペシフィックな施設をつくることに注力すると良い。
- ・ 寄付金のことも考え、20～30年後にどうなるかの視点が必要。
- ・ 最初のミッションを一貫して持ち続けることは難しいが、持ち込み企画の選定などを考えても、本来の目的を忘れないことは重要なことになる。
- ・ 人の入れ替わりもある。良い人材を最初に採用し長く働いてもらうためにも、働けることのプライドや優秀な人へのフィーを上げることが重要。

◆ 「こども本の森」をつくる意義

- ・ 紙の本で読む行為とデジタルで読む行為は、脳の使い方も含めて違う（バイリテラシー）と言われている。両方の使い分けを考えたいうえで、未来向きの紙の本を集める図書館にしていく必要がある。
- ・ ネットでその場のことが分かった気になるが、実際体を運んで場所を体感する、五感総動員でその場所を感じるのは何よりも情報量が多い。図書館という場所はメディアである。
- ・ 図書館のライバルは、時間を奪っていく様々なもの。読むという特別な時間をどう作るかを促す必要がある。
- ・ いきなり「こども本の森」にきて誰もが楽しめるかと言えばそうではなく、それ以前の読書との出会いが重要。そういった素地がないと本の森に来ても持て余してしまう。来館には、保護者が読書好きかも関係する。
- ・ 子どもは環境を問わず皆平等で公平であるべきで、誰もが物語等の素晴らしさを享受すべきというのが最初の出発点（それはそもそも市立図書館の使命であるが、子どもは親に連れてこられないと来館できないので、学校連携がキーワードになる）。

(4) 有識者

ア 実施概要

本施設は大学の中にあることが特色であり、「学び」が重要なテーマとなります。さらに「学び」は本からだけでなく、人から学んだり、学びあったり、あるいは活動することで得られる学びもあります。そのため、「学び」や「活動（ものづくり）」を専門とし、業界で活躍する有識者に、そうした場をつくっていくためのヒントをいただきました。

対象 「学び」や「活動（ものづくり）」を専門とする有識者5組、計10名
(以下は実施順)

①中島さち子氏（㈱steAm 代表取締役）／鈴鹿剛氏（四国大学）

②北海道教育大学連携事業関係者（大日本印刷㈱）4名

③山内佑輔氏（VIVISTOP NITOBE）

④有山裕美子氏（滋賀文教短期大学）

⑤鎌倉てらこや（全国てらこやネットワーク）2名

期間 令和6年1月5日（金）～2月5日（月曜）各1時間

方法 対面またはオンラインによるヒアリング

質問内容

- ・ 普段の活動の中で大事にされていること、工夫、課題
- ・ 子どもとの学びやプログラムの実施、運営に適切な人材
- ・ 大学や学生との関わりについて
- ・ 運営に必要な機器、スペース
- ・ 施設の利点（大学内、自然の豊かさ）から考えられるプログラム
- ・ ものづくりと本との関わりの可能性 など

※当日の質問内容は有識者の専門により柔軟に変更しながらヒアリングを実施した。

イ 実施結果

	主な意見
① 中島さち子氏／鈴木剛氏	・ 図書館の役割が「知の受容だけでなく知の創造の場へも」と拡張されつつある。日本では静かに本を読むことが前提という雰囲気があるので、海外の事例のように「知る」と「作る」でゾーニングを分け、音が出て問題ないようなスペースも作ると良い。 ・ 場を回す「人」が重要。遊び場として、その場の空気感を醸成し、発想や創造のアイデアを引き出して伴走できるメンターを複数名養成し、常駐すると良い。研修や道具に予算を投じることも必要。 ・ イベント時に行くだけの場所ではなく、日常的な市民の遊びの場としていくと良い。一方で、さまざまな市民・子どもの創造性を引き出されるような、可変的なイベントが開催できる場や機会を持つと良い。 ・ 学生は、大学学内のバイトとして働き、子どもと一緒に自分の対人スキル育成やさまざまな学びにつなげられると良い。 ・ 大学における「伝え方」のままだと、一般にも子どもにも難しくなりすぎる傾向があるため、子どもがわくわくすることを中心におけるようなサポートの仕方ができる人材が大切。 ・ 研修で話を聞くだけではなく、自分たちがテーマを設定し何か問いや作品をつくる、さまざまな新しい道具も交えて遊ぶという経験が大切。それにより道具を本や大学の専門知と創造的に絡められる。 ・ メンターは、子どもに対して教えるのではなくアイデアを肯定し、引き出し、さまざまなことを一緒に楽しめるなど、伴走者としての役割や精神、資質が大事と考えられる。 ・ 遊びたくなる、新たな砂場のようなラフなイメージの道具の選び方、空間設計が良い。 ・ 空間、人、道具、活動の4要素（ハードとソフト）が有機的に絡みあうことが重要。場（空間）のあり方が人の創造性に影響を与える。 ・ ゆるやかに可変しながら様々なことができる空間が良い。本に絡めた遊び（多様な場や姿勢で読める空間も含め）もあると良いが、触覚を含めた五感を開くような、ハンズオンの創造の遊び場があると良い。

	主な意見
②大日本印刷株 (教育大 STEAMers ラボ事業関係者)	・ 学習プログラムをマップとして用意すると、ステップが先に見え、「制覇したい」「次はこれをやりたい」と言いやすい。一方で内容が固定され、子どもが自由に発想を広げていくにはやりにくい。 ・ 家庭環境の特性や個人差を考慮すると、プログラムがあることは、共通のスキル獲得、基礎づくりには役に立つ。 ・ 自由にして良いといっても発想が浮かばない。3D プリンターなどは、サンプルがあると良い。 ・ おもちゃ屋さんの体験コーナーにならない工夫が必要。レゴを組み立てて遊ぶことが楽しくなってしまうではなく、プログラミング等、学びへのつなぎ方が必要。子どもたちが動き出すためのきっかけづくりをする人が必要。 ・ 運営に適しているのは、コミュニケーションスキルのある人。子どもが主体であるため、メンターは先生ではなく、正解を教えるのではない。子どもと一緒に調べても良いため、専門的な知識は問わない。
③山内佑輔氏	・ 子どもたちに教育プログラムを提供するのではなく、子どもたちをパートナーとしてともに事業（プロジェクト）を行う。ただし、短期で成果を出そうとせず、子どもとの共創は時間がかかるという覚悟を持つことが必要。 ・ 子どもだけが考えるのではなく、大人も共通のテンションがかかるテーマを設定するなど、いかに共同・共創できるか。大人の前向きな関わり方が必要。 ・ あまり事前に決めすぎると、制限されることもある（例：親不参加、口出し禁止とするかなど）。やってみなければ分からないことに対して、運営側の覚悟が必要。 ・ 「自分たちでつくること」。司書自身が、日常の仕事でどう機器を使えるかを考える必要がある。 ・ 子どもとの協働を考えると、「まずはやってみる」という精神が必要。大人（スタッフ等）が自分で手を動かしてみることができないと、その場の偶然性を受け入れるのが難しい。 ・ 対外的に分かりやすく見せて発信するには、取っ掛かりとしてプログラムがあった方が良い。そういう意味でパッケージも必要。両輪が良い。

	主な意見
④ 有山裕美子氏	・ 図書館で色々な情報や発想を得た後で、実際につくってみたり、触れる形でアウトプットできると、子どもたちの活動の可能性も広がるし、図書館として面白い。 ・ 「ものづくり」の機器やスペースが、誰でも触れられる場所にあり、可能な限り制限を設けず、自由に使えると良い。 ・ 認知も必要。図書館と「ものづくり」を結び付けていく接点を見つけ、関係者内の認知度を高めていくことで継続していこうという雰囲気につながる。 ・ 責任者を明確にしておき、いつでも使える状態にしておくこと。中・高校生のように生徒が自主的に活動できる仕組みをつくると、しばらくすると講師がいなくても良い状態がつかれることがあった。 ・ ライブラリーが姿を変えている中で、ライブラリアンも進化しなければならない。 ・ 図書館でやるイベントはハードルを下げて、参加しやすいプログラムを用意すると良い。簡単なことから始めて、本格的なことをやりたい子にはプログラミングの本を紹介したりすると良い。また、地域の課題解決につながるようなプログラムを実施するのも良いと思う。 ・ 大学構内に作るのであれば、大学生をうまく巻き込めると良い。ボランティアだけでなく、授業の中でも図書館と連携して一緒に何かできるのではないかな。
⑤ 鎌倉てらこや	・ 子ども一人ひとりと大学生の関わり、人間関係を大事にしている。 ・ 大学生と子どもたちが関わりながらやりたいことを一緒に探していくという活動スタイルで、先生や大学生が何か教え諭すという手法は取っていない。 ・ 研究への活用などは任意としており、学生たちの居場所にもなっていたり、子どもとの関わりに喜びや価値を感じたり、ミーティングによる学生同士の連帯が生まれたりする。学生たち自身の価値や魅力を学生自身が発見していく仕組みづくりが大事。 ・ 安全管理で、子どもが急に飛び出したりしないよう学生が常に傍にいて対応できる距離感を取っている。事故の予測は大事。 ・ 子どもたちを故意に傷つけないなど、大きなルールを学生と共有している。